

奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

2001

奈良市教育委員会

目 次

- | | | |
|-------------------------|-------|----|
| 1 奈良市ベンショ塚古墳出土の馬具 | 森下浩行 | 1 |
| 2 平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品について | 原山憲二郎 | 13 |

奈良市ベンショ塚古墳出土の馬具

森 下 浩 行

I. はじめに

奈良市山町塚廻に所在するベンショ塚古墳は、古墳時代中期前半の前方後円墳で、馬蹄形の周濠を有する。1990年に、奈良市教育委員会が、稻荷神社建設に伴って、墳丘測量調査と後円部の発掘調査を実施した。その結果、墳丘の規模（周濠を含めた全長106m、墳丘全長70m、後円部径38m、前方部幅42m）と、後円部頂には3基の埋葬施設があることを確認した¹⁾。

制限された調査であったが、最も残存状態の良好であった第2埋葬施設（簡略化した粘土郴に包まれた割竹形木棺）から、武器・武具・馬具・工具・玉などが出土した。そのうち、馬具は、杏葉を伴わない点からみても、伴出遺物からみた古墳の年代観からみても、初現期の一例と考えられ、日本における馬具の受容と変遷を考える上で、重要であると思われる。したがって、ベンショ塚古墳出土の馬具をここに報告し、古墳時代の馬具の中での若干の位置付けを行ないたいと思う。

II. 出土状態

馬具は、すべて木棺東小口の棺外から出土した。鞍と雲珠が各1点、鉸具が2点である。鞍は、木質部のほとんどが朽失しており、後輪と前輪の金具のみが出土した。鞍金具は、盜掘のため、あるいは墳丘に生えている木の根に押されて、崩壊、欠損している部分もあるが、ほぼ全体が残存している。後輪金具は、鞍の木質部が腐朽によって崩れる前に、木の根に押されてやや傾いた状態で残っていた。したがって、覆輪、海金具、磯金具、洲浜金具の配置がくずされず、埋葬当時のままであった。前輪金具は、木棺の腐朽によって、棺内へ崩れた状態で出土した。鞍は、後輪を東（棺小口外方）に向け、前輪を棺小口に接して置かれていたものと思われる。雲珠と鉸具は、後輪と前輪の間から出土しており、鞍の居木の下に置かれたのであろう。

III. 鞍金具

前 輪 覆輪、海金具、磯金具、洲浜金具で構成される。一部を除いて、鉄製である。

覆輪は、厚さ2mmで、断面は三角形を呈する。爪先は一端しか残っていないが、木地との固定は、先端から3.5cmのところで、1本の鉄製鉢で留めてある。鉢頭の直径は5mmである。鉢脚の先端は欠失しているが、長さは2cmほどであろう。馬挟みは、欠損している爪先を復元すると、41cmで、高さは26.5cmである。

海金具は、厚さ2mmの長方形の鉄板5枚を用いている。この5枚の配置は、向かって右端の1枚については磯金具に付着した状態で出土したことから、ほかの4枚については後輪金具の出土状態から、復元した。5枚を左右対称に配置したものと思われる。磯金具に付着した右端の1枚は、磯金具の上縁に海金具を重ねており、ほかの4枚も同様に固定されたものと思われる。中央の1枚は、縦5.5cm、横4.2cm、その両脇の2枚は、縦5.5cm、横3.1cm、両端の2枚は、向かって右が縦4.5cm、横3.0cm、左が縦4.3cm、横3.1cmである。それぞれ四隅を鉄製の鉢で留めて、木地と固定している。鉢頭の直径は約5mm、鉢脚の長さは1cmである。

磯金具は、左右2枚からなる。厚さ2mmで、下縁を4~5mm折り返し、上縁には帯状の縁金具が付く。縁金具に鉄製の鉢を打ち、洲浜金具とともに木地に固定している。縁金具の大部分は鉄製であるが、洲浜の上を通る一部が銅製である。この部分に向かって左端が欠失しているため、正確な長さは不明だが、2.3cm分残存している。向かって右端は、鉄製の縁金具に一部重なるように固定されており、他の縁金具と同様にしっかりと固定されている点を考えると、使用時の破損を補修したというよりも、製作時の何らかの事情によって、一部が銅製となったと考える。縁金具の幅は5~6mm、厚さは2mmで、鉢は約7mm間隔で密に打っている。鉢の数は、洲浜部分を含めて74本である。金具の裏面には、木地の一部がわずかに残っている。鉢帶に沿って木目が見られ、鉢帶の下には、木口面が接したような感もうかがえるのだが、よくわからない。

洲浜金具は、幅9.0cm、高さは向かって右端で5.4cm、中央で2.0cmで、くりが深い。厚さ2mmである。

なお、爪先の幅は32.5cm、洲浜金具までの最大高16.0cmである。

後 輪 前輪と同様に、覆輪、海金具、磯金具、洲浜金具で構成される。いずれも鉄製である。

覆輪は、前輪と同様に厚さ2mmで、断面は三角形を呈する。木地との固定は、向かって右側の爪先から3.5cmのところで、1本の鉄製鉢で留めている。鉢頭の直径は6mm、鉢脚の長さは1.5cm内外と思われる。左側については、破損したのか見当たらない。馬挟みは57.5cmで、高さは30.0cmである。内面の木地は、よく残存しており、覆輪に沿って木目が見られる。

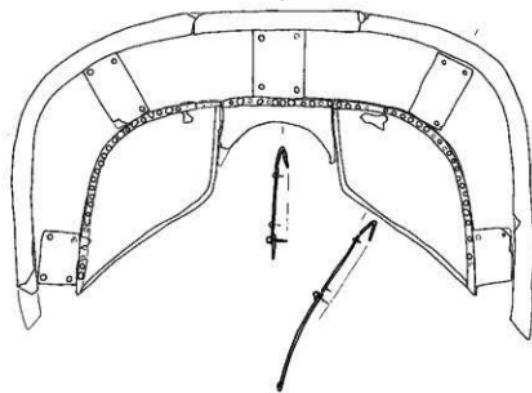
海金具は、前輪と同様に厚さ2mmの長方形の鉄板5枚を用いている。5枚の配置は前輪と同様と思われる。中央の1枚は、縦5.4cm、横4.4cm、その両脇の2枚は、向かって左が縦5.6cm、横3.8cm、向かって右は半分を欠損しており、縦の長さは不明だが、横は3.7cmである。両端の2枚は、向かって右が縦4.4cm、横3.6cm、向かって左が縦4.6~4.8cm、横3.6cmである。それぞれ四隅を鉄製の鉢で留めて、木地と固定している。鉢頭の直径は、鋳化の少ないところで約3mmであり、長さは、残存状態の良いもので、9mmである。

磯金具は、前輪と同様に左右2枚からなり、厚さ2mmで、下縁を4~5mm折り返し、上縁には帯状の縁金具が付く。その上に鉄製の鉢を打ち、洲浜金具とともに木地に固定している。縁金具は幅5~6mm、厚さ2mmで、鉄製の鉢を約7mm間隔で密に打っている。向かって右の磯金具の中央やや下には、2.7cm間隔で小孔が2個空たれ、軸を差し入れたものと思われる。左については、破損のため、小孔の位置は不明だが、右と同様であると思われる。

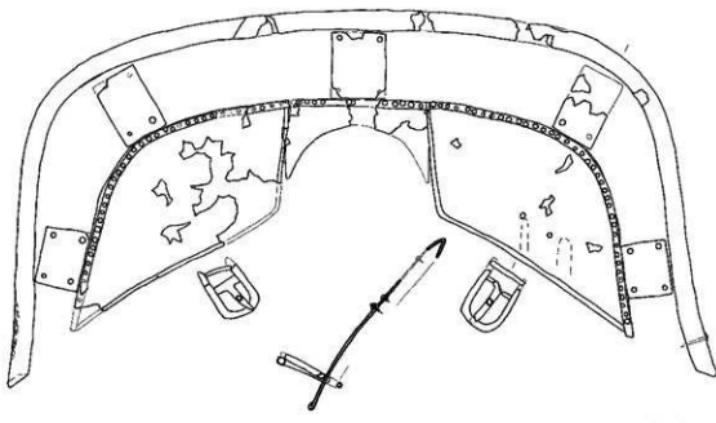
鞍の形態は、鉢具タイプで、長さ5.1cm、幅3.3cmの馬蹄形を呈する。刺金とそれを支える横軸をひとつの金具でつくる。また、基部端にも横棒がある。刺金と基部端の横棒との間は1.1cmである。鞍に鞍を差し入れてのちに基部端の横棒を通したのであろうか。同形態の京都府宇治二子塚古墳出土の鞍は、刺金と基部端の横棒との間に紐を通して鞍橋に括り付けたと推定されている³⁾。

洲浜金具の幅は、復元すると10.8cmである。高さは、左端で6.5cm、中央で2.1cmで、前輪と同様にくりが深い。厚さは1.5mmである。

なお、磯金具の爪先の一端が欠損しているが、復元すると磯金具の爪先の幅は46.0cmで、洲浜金具までの最大高19.2cmである。



前 輪



後 輪

0 20cm

ベンショ塚古墳出土の鍍金具（表面）

1/4

IV. 雪珠

鉄製環の周囲に8個の鉄製方形革留金具がつく。貢金具は伴わない。環の直径は5.7~6.0cmで、ほぼ正円である。環の断面は長方形で、幅0.5cm、厚さ0.25cmである。重さは12.8gである。方形の革留金具は、ほぼ正方形の金具の四隅に4個の鉄鉢を打ったもので、該脚の先端をそれぞれ内方に折り曲げることによって、革帶を留める。金具の一辺は2.0~2.2cmである。金具の重さは、最も残存状態の良いもので、3.93gである。鉢の長さは1.1~1.5cmで、鉢頭は直径0.3~0.4cm程度の円形である。

V. 鉗具

2点ある。鉄製で、形態はそれぞれ異なる。

1は、長さ5.0cm、3.7cmで、馬蹄形を呈する。刺金とそれを支える横軸は別つくりで、横軸は基部端にある。重さ23.8g。

2は、長さ5.8cm、幅4.4cmで、馬蹄形を呈する。刺金とそれを支える横軸は共につくり、基部端にさらに横棒がある。刺金の長さは4.4cmである。重さ35.9g。

VI. ベンショ塚古墳出土馬具の位置付け

1. 鞍金具の分類と位置づけ

まず、古墳時代の鞍金具を分類し、変遷をみるとことによって、ベンショ塚古墳の鞍金具の位置付けを明確にしてみたいと思う。古墳出土の鞍金具は、覆輪、海金具、磯金具、鞍からなるが、必ずしもすべての金具を備えておらず、むしろすべての金具を備えたものはほうが少ない。また、盜掘等によって破壊され、欠けた部分もあり、すべてを同列に扱うことはできないが、部品ごとに分類して、先後關係等をみていくことにする。

覆輪の断面形態による分類 4種類に分類できる。

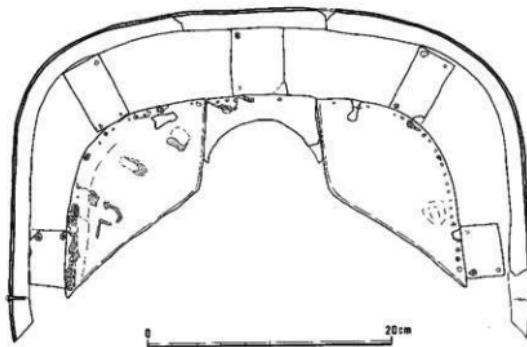
第1類 断面が三角形をなすものである。幅1cm程度の狭いものに限られる。ベンショ塚古墳と岐阜県中八幡古墳例がある。ただし、中八幡古墳例は、緩やかに折り曲げたもので、必ずしも全体にわたって明確に三角形をなしているとはいいがたい。古墳の年代は中期である。

第2類 断面がU字形をなすものである。幅1cm程度の狭いものとそれ以上の幅が広いものとがある。大阪府鞍塚古墳例をはじめとして、大部分のものがここに含まれる。中期、後期のいずれにもある。

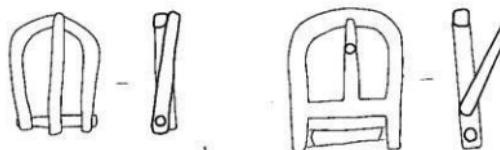
第3類 断面が五角形のものである。例として、奈良県市尾墓山古墳、福岡県沖ノ島7号遺跡をあげる。前者の年代は後期前半である。

第4類 断面が方形のものである。例として、奈良県珠城山3号墳、福岡県新延大塚古墳、同宮地獄古墳をあげる。古墳の年代は後期後半である。

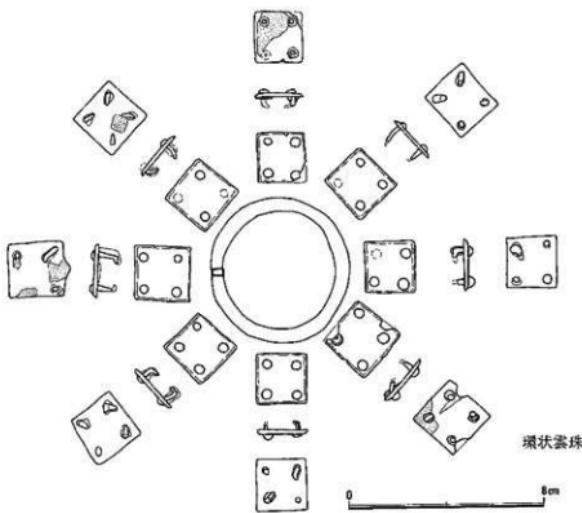
古墳の年代観からみると、断面形に角を有するものは、第1類→第3類→第4類という順に変遷がみられ、一定方向の変化を示していない。ただ、第3類と第4類では、装飾的に明瞭な稜線を設けているのに対して、第1類では、鞍橋の木地輪に合わせた狭いものにするために、断面形



鞍金具（前輪：断面及び裏面）



鞍具



環状雲珠

ベンショ塚古墳出土の馬具

鞍金具（前輪、裏面）は1/4、鞍具、雲珠は1/2

が三角形になったものと解される。また、第2類については、幅の狭いものから広いものへ変化している。これらの変化は出土した古墳の年代とも符合する。先後関係は、断面形態よりもむしろ木地の厚さの変化に対応した幅の変化にみられ、おおよそ中期は幅1cm程度の幅の狭いもの、後期は1cm以上の広いものとすることができる。ベンショ塚古墳の覆輪は、幅の狭い古い形態で、断面が三角形であるのは、幅を狭くしようとした意図があったといえよう。

覆輪の爪先での木地との接合 爪先で木地との接合に何らかの仕様を施すものがある。2種類の形態に分けられる。

A 類 外側から鉄を打ち込んで接合をはかるものである。例として、ベンショ塚古墳のほかに、大阪府鞍塚古墳、同御獅子塚古墳、同誉田丸山古墳1号鞍、滋賀県山津照神社古墳をあげる。山津照神社古墳鞍については、爪先かどうか不明である。山津照神社古墳以外は中期の古墳である。

B 類 先端を内側に折り曲げて接合をはかるものである。例として、奈良県市尾墓山古墳、同藤ノ木古墳等をあげる。後期の古墳に限られる。

出土した古墳の年代観からみて、A類は、B類よりも古く位置付けることができる。A類のような仕様を施す例は数少ない。ベンショ塚古墳の爪先は、古いA類の形態である。

海金具の分類 海金具のある例はわずかである。全面に金属板を貼るものと部分的に金属板を貼るものがある。ベンショ塚古墳例は後者である。また、部分的に金属板を貼るものと数枚の金属板を使って全面に貼るものには、海の部分を分割する形態が大きくみて2種類ある。ひとつは、ベンショ塚古墳鞍のように数枚の方形板を用いる、または鉄帯で区画して、縦方向に分割するもの、もうひとつは、海の曲がりにあわせて横方向に分割するものである。前者では、ベンショ塚古墳以外に奈良県市尾墓山古墳、同東大寺山6号墳例等をあげる。後者では、宮崎県西都原出土例、奈良県藤ノ木古墳鞍B例等をあげる。また、藤ノ木古墳鞍Aのように前者と後者をあわせたような例も存在する。この分類による先後関係はみとめがたい。

なお、海の部分を方形板金具で構成する鞍については、ベンショ塚古墳以外に類例を知らない。しかし、同様の方形板金具が出上している古墳がある。京都府物集女車塚古墳、和歌山県寺内34号墳、同天王塚古墳、福岡県竹原八幡塚古墳、同新延大塚古墳、同梅林古墳である。ただし、これらはいずれも磯金具とは離れた状態で出上しており、必ずしも海金具であるという確証はない。数枚の方形鉄板で海の部分を分割する形態、そして、縦方向に分割する形態は、ベンショ塚古墳鞍が最も古いもので、のちに鉄帯等によっても区画するようになったと考えられる。

磯金具の分類 平面形態によって、長さに比べて幅が広いものと狭いものとに分類にできる。広いものにはベンショ塚古墳、大阪府誉田丸山古墳、同鞍塚古墳、滋賀県新聞1号墳例等をあげるが、それ以外の大部分は狭いものの範疇に含まれる。幅広のものは、中期古墳から出土したものに限られる。幅の狭いタイプは、一部を除いて中期にはみられない。幅広のものから幅狭のものへという変遷が考えられる。ベンショ塚古墳の磯金具は、中期の古いタイプに含まれる。

また、磯金具周辺の縁金具の接合方法、形態によって3種類に分ける。

A 類 上辺は縁金具を鋲留めするが、下辺は鉄板（金属板）がそのまま露出した状態であるもの。例として、大阪府誉田丸山古墳、同御獅子塚古墳、滋賀県新聞1号墳をあげる。中期の古墳にみられる。

- B 類 上辺はA類と同様に縁金具を鉢留めするが、下辺は鉄板の縁を折り返すもの。例として、ベンショ塚古墳、大阪府鞍塚古墳、奈良県牧野古墳をあげる。牧野古墳以外は中期の古墳である。
- C 類 上辺、下辺ともに縁金具を鉢留めするもの。例として奈良県市尾墓山古墳、藤ノ木古墳B・C鞍、京都府物集女車塚古墳、大阪府長持山古墳等をあげる。中期末の古墳からみられるが、後期の古墳に多くみられる。さらに、部分的に礎金具の縁に突起を造り出し、その部分で鉢が礎金具と接続する簡略化したものがある³。例として、福岡県新延大塚古墳、岡山県玉墓山古墳、鳥根県岡田山1号墳等をあげる。後期後半の古墳に多くみられる。

礎縁辺の装飾化を一定方向の変化と考えた場合、型式学的にA類→B類→C類という変遷になる。これは古墳の年代観ともおむね矛盾しない。ベンショ塚古墳の礎金具は、型式学的に最も古くは位置付けることはできない。しかし、古墳の年代観からみて、A類とB類との間に明確な時期差があるとは考えがたい。A・B類は古い一群で、C類は新しい一群と考えられる。

なお、中期のものに限れば、5世紀後半を境に鉢帯の鉢間隔が密なものから粗いものへ変化するという指摘がある⁴。鉢間隔が密なベンショ塚の礎金具は、ここでも古く位置付けられる。

軸の分類 増田精一によって、形態から鉢具型と鋸型とに、また、鉢脚と鉢具ないしは鋸が一体のものと、分離したものとに分けられている⁵。また、これに加えて、鉢脚の形状からさらに細分されている⁶。ここでは以下の分類にとどめておく。

・鉢具型

- A 類 鉢具と鉢脚が一体のもの。鉢脚の末端にはさらに横棒を渡す。奈良県ベンショ塚古墳、同石光山8号墳、和歌山県大谷古墳、岡山県隨庵古墳、宮崎県下北方5号地下式横穴等に例がある。

- B 類 鉢具と鉢脚が一体のもの。鉢脚の末端は外側に折り曲げる。大阪府長原七ノ坪古墳等に例がある。

- C 類 鉢具と鉢脚が分離したもの。奈良県市尾墓山古墳、同藤ノ木古墳等に例がある。

・鋸型

- B 類 鋸と鉢脚が一体のもの。鉢脚の末端は外側に折り曲げる。愛知県豊田市大塚古墳例がある。

- C 類 鋸と鉢脚が分離したもの。奈良県牧野古墳、同鳥塚古墳等の例がある。

これらは、鉢脚の形態によって、礎金具、座金具の孔の形態も異なり、A類・B類では小孔が2個穿たれ、C類では方形の孔が穿たれるものと思われるが、実際には、A類・B類でも方形孔のものは存在する。

出土古墳の年代観からみると、鉢具型、鋸型とともにA類→B類→C類（A類は鉢具型のみ）という変遷をたどったものとみられる。A類は鉢具型のみであることから、まず鉢具型が出現し、遅れて鋸型が出現したものと思われる。そして、鉢具型B類の段階で、鋸型B類が出現し、以後、両型式は同一の変遷をたどったものと思われる。なお、鉢具型A類とB類については、中期あるいは後期初頭に限られる。鉢具型A類に分類されるベンショ塚古墳の軸は、最古型であることがわかる。

以上のことから、部品からみた古墳出土鞍には新古があり、大きくみて、5世紀のタイプと6世紀のタイプがあると考えられる。そして、ベンショ塚古墳出土鞍は古いタイプに位置付けられることが明らかになったと思う。

2. 環状雲珠の分類と位置付け

環状雲珠の分類は、断面形によっても行なえるが、それによって、型式学的変遷をみることができるかは疑問である。また、環状品のみが出土した場合、はたして確実にそれが雲珠といえるかどうか疑問があるものも存在する。したがって、付属する革留金具、資金具で分類するのが有効かと思われる。次のように革留金具の形態で、A～C類に分類し、資金具の有無と数とで1～3類に分類する。これらを組み合わせて、A 1類～C 3類の9分類とする。

A 類 方形の革留金具が付属する。鉢は4本を四隅に配するが、中央に1本加えた5本のものがある。

B 類 方形・五角形・爪形の革留金具が付属する。鉢は3本である。

C 類 方形・五角形・爪形の革留金具が付属する。鉢は中央に1本である。

1 類 資金具が伴わない。

2 類 資金具が1条ずつ伴う。

3 類 資金具が2条ずつ伴う。

これらは型式学的にみて、A類→B類→C類、1類→2類→3類というように、鉢の簡略化と資金具の多条化という一定方向の変化がみられる。

具体的に出土古墳をみてみると（環状仕金具を含む）、A 1類には、ベンショ塚古墳、兵庫県西宮山古墳、A 2類には、滋賀県新聞1号墳、埼玉県稻荷山古墳、A 3類には、東京都狛江龟塚古墳、埼玉県日沼9号墳、B 1類には、大阪府敷塚古墳、同御獅子塚古墳、B 2類には、京都府宇治二子山古墳、同物集女車塚古墳、滋賀県新聞1号墳、C 1類には、奈良県ダケ古墳、兵庫県西宮山古墳、三重県伊丹川茶臼山古墳、C 2類には、和歌山县大谷古墳、岡山县犬狗山古墳、埼玉県稻荷山古墳、C 3類には、奈良県市尾墓山古墳、大阪府七ノ坪古墳をあげる。

2個以上の雲珠が出土して、類型が重複している古墳があるが、古墳の年代観からみて、ある程度の型式学的変遷を反映しているよう見える。また、横穴式石室などの追葬が可能な埋葬施設から出土している場合、なかには環と付属金具の関係が不明瞭なものもある。たとえば、C 1類などは、鉢1個であるのに資金具が伴わなければ、革留めの状態は非常に不安定である。また、資金具を作わないA 1類、B 1類には鉢の先端を折り曲げたり、かしめて直接革帯との接合をはかるのに対して、資金具を伴う2類、3類ではこれらを行わないものが多く、鉢の長さも短いものが多い¹⁷。したがって、資金具の存在が鉢の数の減少、鉢脚の長さの減少をもたらしたと思われる。鉢脚の長さなども考慮にいれて、今一度、上の変遷をみてみると、鉢脚の先端に何らかの処置を行ったA類、B類については、中期の古墳から出土したものに限られ、型式学的変遷はいっそう確かなものといえそうである。A類・B類については、あまり時期差が考えられないところから、最初から2系統が存在し、資金具の出現によって鉢脚の長さが減少し、A類・B類の出現よりも若干おくれてC類が出現した可能性が高いと思われる。いずれにしてもベンショ塚古墳の環状雲珠は、最古型式に位置付けられよう。

VII. ベンショ塚古墳鞍金具の系譜

以上のことから、ベンショ塚古墳の馬具は、鞍金具も環状雲珠もそれぞれ古いタイプに位置付けられ、型式学的にみても初期（5世紀タイプ）の馬具と考えて良いと思われる。つづいて、ベンショ塚古墳の系譜について、初期の鞍金具の形態から考えてみたい。初期の鞍金具について、2つの説があり、主なものでは、北野耕平は、鉄板張りの鞍金具を金銅板張りをもとに作られた国産とみており¹⁰、また、千賀久は、新羅・加那の同時期に類例が存在することから舶載品とみて差し支えないと考えている¹¹。ここではまず、比較的残存状態の良い、覆輪、海金具、磯金具、鞍を備えた国内の古墳から出土した初期の鞍金具と、ベンショ塚古墳の鞍金具とを比較してみよう。

大阪府豊田丸山古墳¹² 鞍は2具あり、いずれの鞍も前輪、後輪の覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っている。金具は、すべて金銅製で、磯金具と海金具には龍紋の透かしがあり、装飾性の豊かなものである。覆輪の断面は、U字形で、幅狭である。1号鞍の爪先での木地との接合は、ベンショ塚古墳鞍と同様に外側から鍛を打ち込んで接合しているようである。磯金具は、ベンショ塚古墳鞍と同様に、幅広であるが、下辺には紙幣も折り返しもない。鞍の付く位置には長方形孔がある。

大阪府鞍塚古墳¹³ 前輪、後輪ともに鉄製の覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っている。覆輪の断面は、U字形で、幅狭である。海金具は、2枚の鉄板の中央に別の小鉄板を当てて鍛留めし、全面を覆う。磯金具は、ベンショ塚古墳鞍と同様に、幅広で、下辺の縁を折り返しており、鞍が付いたと思われる小孔2個がある。磯金具は、ベンショ塚古墳鞍と最も良く似ている。

大阪府御狮子塚古墳¹⁴ 前輪、後輪とともに鉄製の覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っているが、海は、細い帯状のものを鍛留めしており、補強の為のものであろう。覆輪の断面はU字形で、幅狭である。爪先での木地との接合は、ベンショ塚古墳と同様に、外側から鍛を打ち込んでいる。磯と州浜は1枚の鉄板でつくる共造りで、磯の部分は幅が狭い。縁金具を留める鍛の間隔が広く、ベンショ塚古墳鞍より新しく位置付けられる。磯金具には長方形の孔があるが、鞍はベンショ塚古墳と同様の鋲具タイプであり、栗実形の座金具を伴う。ベンショ塚古墳の鞍金具とは共通点の少ない、かなり異なる形態を呈するものである。

滋賀県新開1号墳¹⁵ 前輪、後輪ともに鉄製の覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っている。覆輪の断面は、U字形で、幅狭である。海は、1枚の鉄板で全面を覆う。磯金具は、ベンショ塚古墳例と同様の幅広である。前輪には鞍が付くための長方形孔がみられるが、伴出しているもののうち、鞍になりそうなものは、孔の大きさから考えて、ベンショ塚古墳鞍と同様の鋲具タイプの2点しかない。

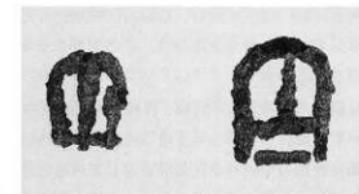
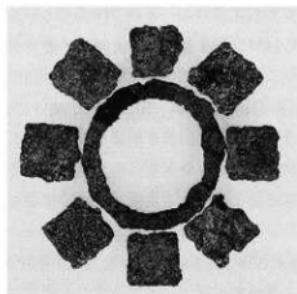
岐阜県中八幡古墳¹⁶ 前輪、後輪ともに鉄製の覆輪、海金具、磯金具、州浜金具が揃っている。覆輪の断面は、ベンショ塚古墳鞍と同様の三角形であるが、緩やかに折り曲げたもので、必ずしも全体にわたって明確な三角形をなしているとはいがたい。幅狭である。海は、おそらく1枚の鉄板で全面を覆うものと思われ、中央に縱方向の紙幣で補強している。磯金具はベンショ塚古墳鞍と同様の幅広である。

宮崎県下北方5号地下式横穴¹⁷ 覆輪、磯金具はみられるが、海金具と州浜金具は不明である。磯金具は、ベンショ塚古墳鞍と同様の幅広で、鋲具タイプの鞍が付く。

これらの国内の古墳出土の鞍金具とベンショ塚古墳の鞍金具とを比べてみると、必ずしも形態的に一致するとは限らず、細かいところでは差異がかなりみられる。この差異は、ベンショ塚古墳の鞍との比較に限らず、初現期の鞍金具のそれぞれにみとめられ、単純に時期差とみることはできない。また、御獅子塚古墳の鞍金具のように他と比べて、かなり異なる形態もみられる。したがって、最初から複数系統が存在したことを否定することはできない。しかし、差異がある反面、共通している点もみられ、これらの初期の鞍が、舶載品であるか、国産品であるかを問わず、何らかの関連性をもっていたことがうかがわれる。細部の違いを強調するなら、製作、輸入にあたっての複雑な事情をそのまま想定することもできるが、共通点もそれぞれがもっていることからみて、細かく系譜を分類することに意義を見出せない。鞍金具のみで、あまり多くの系譜をみることは困難なように思われる。

海についてみれば、全面を鉄板で覆うものが多く、透かし彫のある例は数少ない。また、ベンショ塚古墳例のように海金具に方形鉄板を用いるものは少ない。朝鮮半島での方形鉄板を用いる例は、加耶の玉田70号墳出土鞍¹⁶があり、海の中央に1枚のみの方形鉄板を使用したものが知られている。また、玉田M3号墳出土鞍¹⁷は、亀甲形の区画ではあるが、ベンショ塚古墳出土鞍と同様の海を縦方向に分割する形態で、鞍は鉄具型Aタイプである。同様の亀甲形の区画は、新羅の天馬塚古墳出土鞍¹⁸にもみられ、この機金具の下辺は、ベンショ塚古墳鞍と同様のB類にあたる。ただ、これら半島の諸例は、これまでの年代観では、ベンショ塚古墳より時期の下るものである。

御獅子塚古墳の例を除いては、州浜が磯と別つくりである点、幅広の磯金具であるという点は、初現期の鞍の一貫した特徴であり、半島、大陸でもみることができる。ベンショ塚古墳の鞍金具は、古い型式に位置付けられる点、諸要素が半島で見られる点では、舶載品の可能性があるが、海金具として方形鉄板を使用した点を含めて、全く同型式のものは見当たらない。内山敏行・岡安光彦は、日本列島から出土した木心鉄板張輪轍に、伽耶と同一の型式的特徴と変異幅があることから、輸入品と考えている¹⁹が、このように考えると、ベンショ塚古墳の馬具も輸入品の可能性がある。半島、大陸での、5世紀の鞍の出土例は少ないけれども、日本出土の5世紀の鞍は、半島系のものと考えられる。確実に鞍金具が国内で製作されるのは、鞍金具の変遷からわかるように、新しいタイプが出現する6世紀からであろう。



環状雲珠

鞍具

<謝辞>

本稿を成すにあたって、次の方々に資料の実見の機会の便宜をはかっていただいたり、ご教示いただきました。記して感謝いたします。

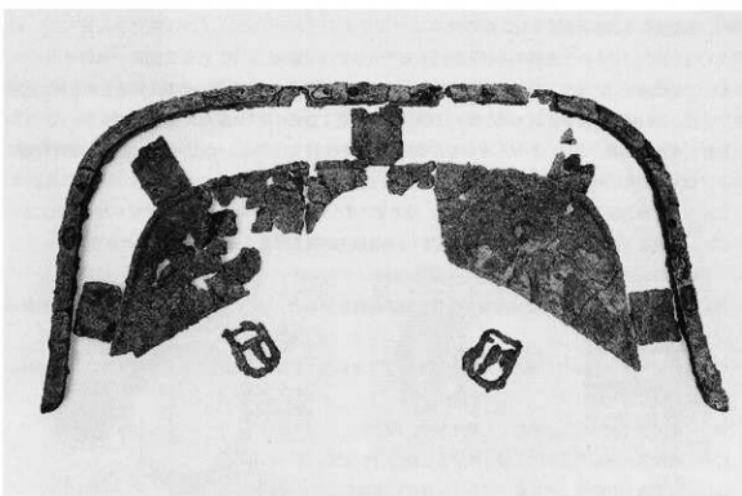
角田芳昭、千賀久、服部聰志、柳木照男、横幕大祐

(註)

- 1) 森下浩行「ベンシヨ塚古墳の調査」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度」奈良市教育委員会、1991年。
 - 2) 山田良三「古代の木製馬鞍」「権原考古学研究所論集」第12、吉川弘文館、1992年。
 - 3) 西尾良一「馬具」「出雲岡山山古墳」鳥取県教育委員会、1997年。花谷浩「鞍作の技術とその変遷」第2回鉄器文化研究集会「畿内政權と鉄器生産」発表要旨集、鉄器文化研究会、1996年。花谷は、突起の上ののみ縁金具と縁金具を貫通させる縁金具の留め付け手法の変化を馬具製作技術が向上し、多種多様な馬具が普及するなかでの、製作技法の変化、手法の簡略化としてとらえている。
 - 4) 千賀久「日本出土初期馬具の系譜2」「権原考古学研究所論集」第12、吉川弘文館、1992年。
 - 5) 増田精一「古墳出土鞍の構造」「考古学雑誌」第50巻第4号、日本考古学会、1965年。
 - 6) 宮代栄一「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」「日本考古学」第3号、日本考古学協会、1996年。
 - 7) A類またはB類でも鋲脚の長さが短いものは資金具がなければ、革留の状態は不安定であると思われる。
 - 8) 北野耕平「中期古墳の副葬品とその技術史的意義—鉄製甲冑における新技術の出現—」「近畿古文化論叢」奈良県教育委員会、1963年。
 - 9) 千賀久「日本出土初期馬具の系譜」「権原考古学研究所論集」第9、吉川弘文館、1988年。
 - 10) 侮原宗治「大阪府下における古墳墓の調査」「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告」第5輯、大阪府、1934年。吉田珠己「丸山古墳」「羽曳野市史」第3巻史料編1、羽曳野市、1994年。
 - 11) 末永雅雄編「鹿塚 鞍塚 珠金塚古墳」由良人和古代文化研究協会、1991年。関西大学博物館にて実見させていただいた。
 - 12) 「御獅子塚古墳」豊中市教育委員会、1990年。豊中市教育委員会にて実見させていただいた。
 - 13) 西田弘・鈴木博司・金間忍「新聞占墳」「滋賀県史跡調査報告」第12冊、滋賀県教育委員会、1961年。
 - 14) 真田幸成「中八幡古墳発掘調査概報」池田町教育委員会、1970年。池田町教育委員会にて実見させていただいた。
 - 15) 野間重孝・石川恒太郎・茂山謙・田中茂「下北方地下式横穴第5号緊急発掘調査報告書」宮崎市教育委員会、1977年。
 - 16) 趙榮濟「狹川玉田古墳群I」「慶尚南道」、1988年。
 - 17) 趙榮濟・朴升土「狹川玉田古墳群II」「慶尚大学校博物館」、1990年。
 - 18) 金元龍・尹武炳・金基雄・ほか「天馬塚発掘調査報告書」慶州市、1974年。
 - 19) 内山敏行・岡安光彦「下伊那地方の初期の馬具」「信濃」第49巻第4・5号、信濃史学会、1977年。
- なお、その他の馬具の文献については割愛させていただいた。



鞍金具（前輪）



鞍金具（後輪）

平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品について

原田 憲二郎

I. はじめに

平成5年に、奈良市西木辻町において発掘調査が行われた¹⁾。平城京の条坊復原で左京五条五坊十三坪の南西隅にあたる。(図1) 検出された主な遺構には、奈良時代の十二・十三坪坪境小路 (S F01) とその東側溝 (S D02)、十三坪の西辺を画する溝 (S D03)、平安時代の井戸 (S E11)、江戸時代の土坑群 (S X14)・土坑 (S K15・16) がある。

調査地では、瓦類が整理箱で205箱分出土したが、大半は江戸時代の土坑群 S X14からの出土である。丸瓦・平瓦が多いが、軒瓦が127点ある。軒丸瓦の内訳は6012A 1点・6091A 50点・6301B 3点・6301種別不明 3点・6308B 1点・型式不明 3点で、軒平瓦の内訳は6572D 1点・6663A 1点・6664 I 2点・6702F 2点・6717A 6点・6717B 36点・6717種別不明 17点・6728B 1点である。このほかに小稿で取り上げる瓦製品がある。この瓦製品に関しては現在まで詳細な報告はされていないため、まずこの遺物について紹介し、その用途について考えてみたい。

II. 平城京左京五条五坊十三坪で出土した瓦製品

瓦製品はすべて破片で、江戸時代の土坑群 S X14から4片、江戸時代の土坑 S K15から2片の合計6片が出土し、うち S X14から出土した2片が接合した。(図2)

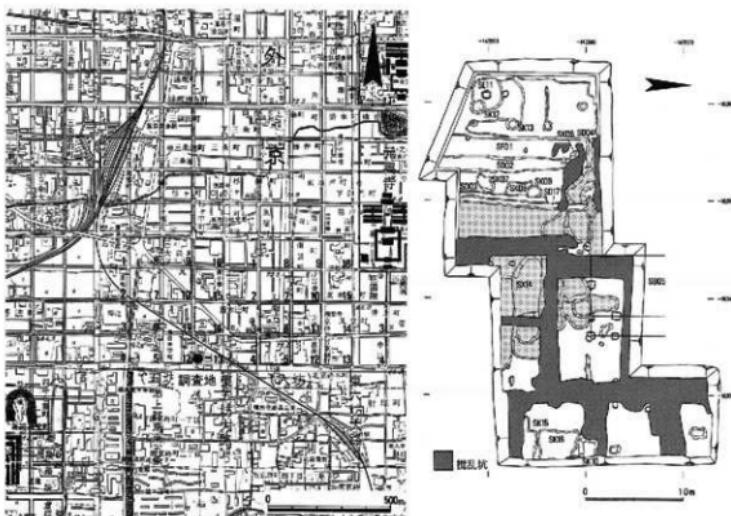


図1 平城京左京五条五坊十三坪調査位置図 (1/20,000)
および遺構平面図 (1/500) (位置図中の数字は坪の番号)

1は2辺が部分的に残る。一方の角部分は約45度に復原できる。片方の面に凸帯、反対側の面には溝を有する。凸帯幅は3cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って強めのユビナデを施す。溝は端面から約1.5cm離れた部分に彫り込まれており、深さ約0.8cmで、幅は約0.9cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、中央付近をやや厚く仕上げている。溝のある面はヘラ削りのちナデ調整により平坦に仕上げている。端部の厚さは約4cmである。胎土は精良である。焼成は軟質で淡赤白色を呈する。S X14から出土した。

2は2辺が部分的に残る。一方の角部分は約45度に復原できる。片方の面に凸帯、反対側の面には溝を有する。凸帯幅は3.5cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って弱めのユビナデを施す。溝は端面から約1.5cm離れた部分に彫り込まれており、深さ約0.7cmで、幅

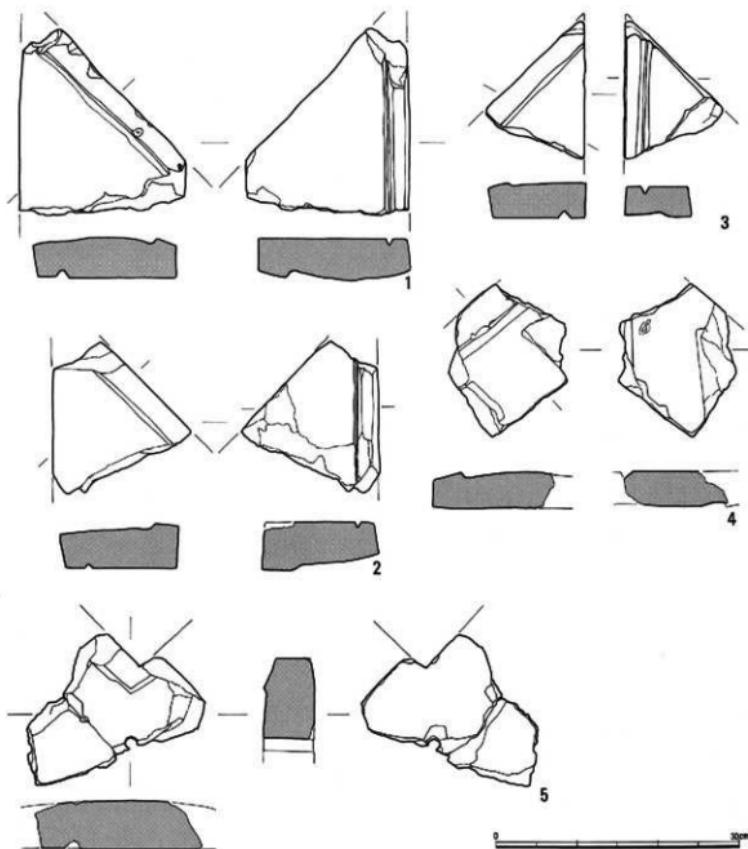


図2 平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品（1/6）

は約0.8cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、凸帯付近をやや厚く仕上げているが、溝のある面は平坦である。端部の厚さは約5cmである。胎土は精良である。焼成は軟質で内部灰白色、外面淡赤白色を呈する。SK15から出土した。

3は2刃が部分的に残る。一方の角部分は約45度に復原できる。片方の面に凸帯、反対側の面には溝を有する。凸帯幅は2.5cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って弱めのユビナデを施す。溝は端面から約1.5cm離れた部分に彫り込まれており、深さ約0.8cmで、幅は約1.0cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、端部側をやや厚く仕上げているが、溝のある面は平坦である。端部の厚さは約4cmである。胎土は精良である。焼成は軟質で淡赤白色を呈する。SK15から出土した。

4は1刃が部分的に残る。片方の面に凸帯を有する。1~3と同様に反対側の面に溝を有するとみられるが、溝の片側は欠損している。凸帯幅は3.5cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って弱めのユビナデを施す。溝は深さ約0.8cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、中央付近をやや厚く仕上げているが、溝のある面は平坦である。端部の厚さは約3.5cmである。胎土は精良である。焼成は硬質で灰白色を呈する。SX14から出土した。

5は片方の面に額状の凸帯があり、反対側の面は平坦である。中央に直径約1.5cmの円形貫通孔がある。釘穴であろう。凸帯は平面形V字形で、凸帯上では約105度の角度があるが、実際に成形された輪郭を測ると約90度である。凸帯幅は4cm程である。凸帯はヘラにより削り出されている。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、貫通孔のある中央付近が両端側に比べてやや厚く仕上げている。胎土は精良である。焼成は軟質で内部灰白色、外面淡赤白色を呈する。2片接合資料で、両破片とともにSX14から出土した。

以上5点が本稿で扱う瓦製品である。これらのうち、1~3は形状・胎土・焼成・色調・製作技法が似ることから、同じ性格を持つものとみられる。ただし、1・2と3は45度の角度を残す部分を基準として並べてみると、凸帯と溝を有する面が正反対に位置していることに気付く。4は1~3と形状・胎土・製作技法は似るが、焼成・色調が異なる。これは1~3が、火災などの二次焼成をうけたためとおもわれ、本来は4と同じ焼成・色調であったとみられる。5は胎土・焼成・色調・製作技法が似るもの、形状が異なる。しかし、1~4と同様の凸帯をもつことから、反対側の面の欠損部に溝を有していた可能性が考えられ、これも同じ性格を持つものとおもわれる。次章ではこれら5点を用いて、復原を試みたい。

III. 瓦製品の復原

1~5が同じ性格のものとすると、1・2と3・4を用いて、平面形直角二等辺三角形に復原することもでき、特殊な壇とみることもできる。西大寺では1~1と同様に平面形が直角二等辺三角形に復原されるものが報告されており、特殊壇として分類されている²⁾。しかし、壇であったとするならば、片面に凸帯、反対側の面に溝を彫り込む必要性はどこにあったのか疑問である。さらに5が同じ性格をもつとすると平面形直角二等辺三角形に復原することはできない。

5のV字形の部分が約90度を測り、1~3の一方の角部分は約45度に復原できることから、1と2、3と4の凸帯の接続点が5であることが推測される。そこで5の凸帯の延長線上左に1と2が、延長線上右に3と4が配置できる。以上の操作からこの瓦製品は、片方の面に凸帯をはどこ

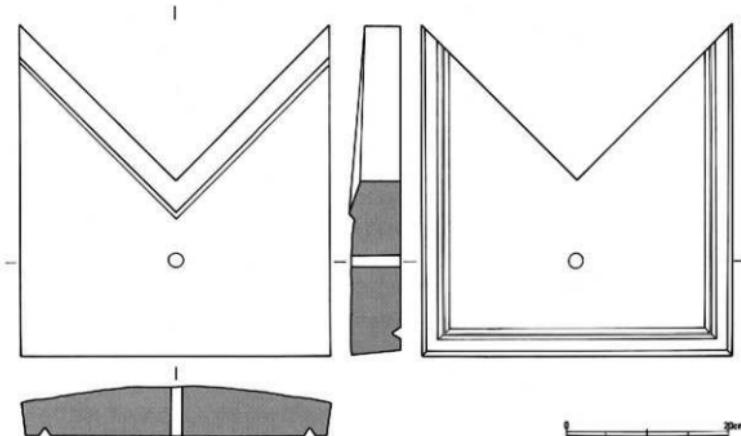


図3 平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品復原図（1/6）

し、その面は両端部から中央部に向かって盛りあがること、反対側の面は平坦で端部付近に溝を巡らすこと、一方が平面形燕尾形を呈すること、ほぼ中心に釘穴を設けることが判る。以上のような特徴から、入母屋や寄棟の屋根などに用いられる隅木の先端を雨水から保護するために用いる蓋形隅木蓋瓦の可能性が高いと考えられる。凸帯のある面が上面で、両端部から中央部に向かって盛りあがる甲盛りは雨水を中央部から両端部へ逃がす水垂れ勾配とみられる。溝のある面が下面で、隅木に密着させやすいように平坦にしているものと考えられる。下面の溝は雨水が下面に廻ってきても、隅木が濡れないように意図した水切りであろう。平面形燕尾形の部分は、垂木の上の横木である茅負の隅角に噛ませるためのものとみられる。釘穴はもちろん隅木に固定するためのものである。

ただし、出土した5点を用いても全幅・全長は明らかにならない。そこで1と5を用い、1を5の凸帯屈曲点に近づけ、できる限り重ね合わせ、最も幅が狭いものとして復原すると、幅は38.4cmと算出できた。全長に関しては、すでに出土・報告されている蓋形隅木蓋瓦を参考にすると、全幅の約1.2倍の長さが多いことから、全幅38.4cmに1.2を掛けて全長46.0cmと考え、復原したものが図3である。下面の両溝間である幅内法は31.5cmで、これが隅木幅の上限寸法を示し、茅負の隅角に噛ませる個所から前面の溝までの長さである出内法は18.2cmで、これが隅木の茅負からの出の上限寸法を示す。厚さは甲盛りのため中央部が厚く約6cm、両端部では約4cmである。釘穴に関しては1穴で復原したが、前後に2箇所あったものかもしれない。

古代の隅木蓋瓦に関しては、稻垣晋也氏が集成・分類を行いつ³⁾、近年では千田剛道氏が平城宮・薬師寺出土品を集成・分類している⁴⁾。しかし、本稿で復原したように上面に凸帯を設け、下面にかかりをもたず、溝を切った蓋形隅木蓋瓦は無い。しかし、平城宮内から出土している千田分類平城宮B型式は似ている。ただし下面にかかりをもっており、そのかかりの上に溝を切ってい

るものである。復原したものは平城宮B型式のかかりを省略したものとみることができようか。

IV. わわりに

以上述べてきたように左京五条五坊十三坪出土瓦製品が、蓋形隅木蓋瓦であると考えたが、おわりに、どこの建物で用いられたものかを考えてみたい。

まず、この蓋形隅木蓋瓦の製作年代であるが、これが江戸時代の土坑から出土したものであることは前に述べた。しかし、一緒に大量に出土した軒瓦はすべて奈良時代以前のものであることから、調査担当者もこの土坑は、近辺から集められ捨てられた瓦の廃棄土坑とみており⁵⁾、蓋形隅木蓋瓦も奈良時代以前の可能性が高いと考えられる。

調査地での奈良時代の遺構には十二・十三坪境小路東側溝（S D02）、十三坪西辺を区画する築地などの雨落と考えられる溝（S D03）が検出されている。このことから、蓋形隅木蓋瓦は築地塀の屋根に使用された可能性も考えられる。しかし、隅木蓋瓦は切妻屋根と考えられる築地塀には必要無いものであり、築地塀用とするには疑問が残る。

そこで、今回出土した蓋形隅木蓋瓦の大きさに注目してみる。過去に報告されている蓋形隅木蓋瓦を集成したものが表1である。これをみると、今回復原した蓋形隅木蓋瓦は、全幅・全長・厚さともに大きい部類に入ることがわかる。今回の復原は前に述べたとおり、もっとも小さかつたと仮定しての復原であり、実際はもっと大きいものであったかもしれない。このようなことから、使用された建物は平城宮内の主要瓦葺建物、または寺院の主要瓦葺建物に匹敵する規模であったと想像され、京内の一般の宅地で使用されたものと考え難い。

では調査地周辺で大規模な瓦葺建物が想定される遺跡はどこに求められるだろうか。『隨心院

番号	出土遺跡	全幅	全長	厚	幅内法	出内法	種別	参考文献
1	大和 平城宮第一大櫛隈窓	(40.0)	(46.5)	8.6	*(37.0)		かかわに花束紋、千田平城宮A型式	1-2
2	大和 平城宮第二大門裏・前室・後室・帝室庭園地区	(35.4)	(38.1)	3.1	*28.0	*22.0	千田平城宮B型式	2-3
3	大和 平城宮第二大櫛隈・後殿・帝室庭園地区	(43.0)	(50.0)	2.5	(29.5)	(27.0)	千田平城宮C型式	2-4
4	大和 平城宮玉手門地区	(28.6)	(31.0)	*3.0	(25.4)		千田平城宮D型式	2-5-6
5	大和 平城宮第二大櫛隈塀地			3.8				4
6	大和 奈良寺南大門地区	34.1	39.1	*3.6	31.2	32.3	かかわに花束紋、千田奈良寺A型式	2-6-7
7	大和 奈良寺南西僧房地	*(34.0)	*(46.0)	*3.0	(24.4)	(25.2)	千田奈良寺B型式	28
8	大和 奈良寺南西僧房跡・兵塔跡			6.2			千田奈良寺C型式	2
9	大和 奈良寺中央塀地	21.9	*(22.5)	1.7	15.5	8.5	千田奈良寺D型式	2
10	大和 奈良寺講堂塀地	*(33.5)	28.8	*1.7	*25.7	(24.5)	千田奈良寺E型式、平安・鎌倉時代型か	2
11	大和 奈良寺西三門・御門塀地			*2.5			かかわに花束紋、千田奈良寺F型式、鎌倉時代	2
12	大和 云居院南出土品	34.7	39.1	4.0	30.6	32.8	かかわに花束紋、板長は上下逆	6-9
13	大和 云居院南食堂塀地	(29.8)	(36.4)	3.0	(26.0)	25.2		6-10
14	大和 大和北庄中央地区			3.0				11
15	大和 善通寺東門地区	29.0	*(40.0)	6.1			蔚平瓦(6739八)の軸用品	6-12
16	大和 中城東左京五条五坊十三坪	(38.4)	(46.0)	6.0	[31.5]	(18.2)		
17	大和 法楽寺西園地区	(35.8)	(42.6)	3.0	[26.7]	[*(16.3)]	かかわに唐草紋	6-13
18	大和 法楽寺東園地区	(30.0)	(39.0)		*[24.8]		かかわ正面に丸団紋、かかわ側面に唐草紋	6-14
19	大和 長泰宮南面中門地区	34.0	35.7	2.8			平瓦の軸用品	6-15
20	大和 崇福寺			2.5			平安後期か	6-16
21	大和 尼足北院寺							17
22	山陰 小渡羅夷寺	(24.0)	(30.5)	3.6	(17.8)	(11.3)	かかわに両丸金毬紋、平安後期	6-18
23	山陰 小渡羅夷寺	(24.0)	(33.5)	3.6	(18.1)	(15.1)	かかわに両丸金毬紋、平安後期	6-18
24	山陰 三輪郡分寺塔塀地	30.2	3.0	23.7	(21.3)			6-19
25	山陰 鹿苑寺大廻廊・内裏地区			4.5				6-20
26	山陰 仁馬郡分寺塔塀地	32.3	38.7	3.9	27.3	15.8		6-21
27	奈良 矢張坂分寺瓦			47.7	2.4			6-22
28	下野 伊勢崎溝跡				5.4			6-23
29	下野 下野松分寺				3.0			24
30	下野 下野松分寺				3.3			24

表1 蓋形隅木蓋瓦計測値表 (単位cm)

凡例

1. () 内の数値は復原値

2. *印は文献および図をもとに筆者が計測した数値

3. 番号16の資料の幅内法・出内法は水切り溝から計測

文書』の天平勝宝8歳(756)の「孝謙天皇東大寺宮宅田園施入勅」⁶⁾や宝亀7年(776)の「佐伯宿禰今毛人同真守連署送銭文」⁷⁾の記載から、調査地東側の左京五条六坊十一・十二・十三・十四坪と五条七坊四坪には佐伯院(香積寺)が、左京五条六坊五坪に葛木寺が、また佐伯院以前には左京五条六坊十四坪に、大安寺の井戸があったことが考定されている⁸⁾。

佐伯院は、同じく『隨身院文書』延喜5年(905)の「佐伯院附屬状」⁹⁾の記載から、宝亀7年に起工、延暦4年から5年にかけて(785~786)完成したと考えられている¹⁰⁾。なお「佐伯院附屬状」には、佐伯院金堂とおもわれる堂舎が、「五間檜皮葺堂舎壱宇」と記載されている。もちろん当初から瓦葺きではなかったと断定されているわけではない¹¹⁾のであるが、金堂すら瓦葺では無かったのではないかと思える記事である。また調査地で出土した軒瓦のうち、年代が明らかなものは、すべて起工された宝亀7年以前のものである。このようなことから調査地出土瓦類が佐伯院で使用されていたものであった可能性は低いと考える。

葛木寺の創建年代は明らかになっていないが、『隨身院文書』から天平勝宝8歳には存在したものとみられる。また『統日本紀』宝亀11年(780)の記事から、大雷による火災のため、新薬師

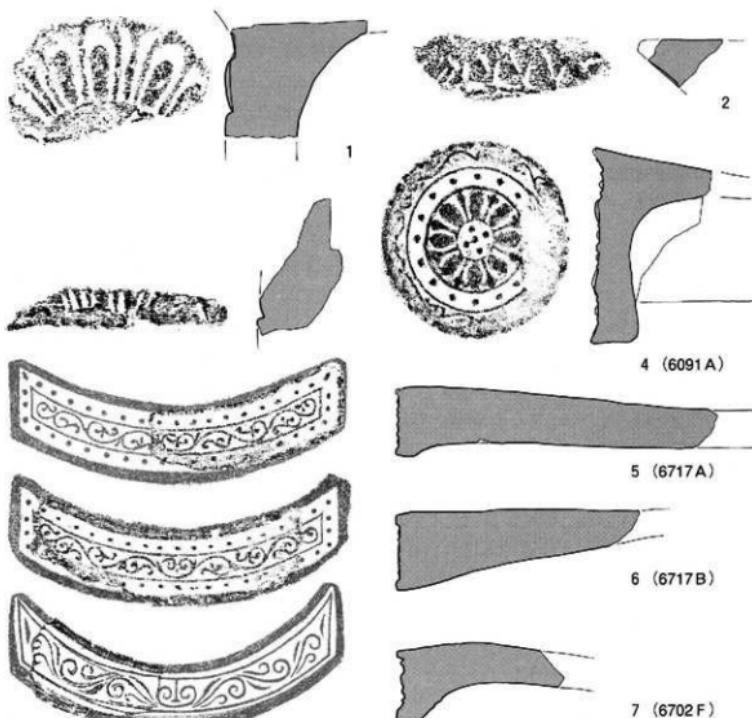


図4 平城京左京五条五坊十三坪出土軒瓦 (1~3は1/2、4~7は1/4)

寺西塔とともに葛木寺の塔や金堂が焼失したことが判る。蓋形隅木蓋瓦だけでなく調査地出土瓦類には火災などによる2次焼成をうけたものが多いことは、この火災の記事と比べて注目される。また、調査地からは6702Fが出上している(図4-7)が、これは飛鳥の葛城寺に比定されている和田庵寺から同范品が出上している¹²⁾。他に調査地からは和田庵寺XXI型式によく似た軒丸瓦片が3点出土している(図4-1~3)。小片の為、同范とまでは断定できなかったものの、¹³⁾上記したこととも考え合わせると、飛鳥の葛城寺=和田庵寺であり、移ってきたのが平城葛木寺で、調査地出土瓦類は平城葛木寺が廃絶後、本調査地の土坑に廃棄された可能性は考えられる。

大安寺井戸に関しては、どのような建物があったかの詳細は不明である。ただ、調査地で出土した軒瓦のうち、最も量的に多いのは6091A・6717A・B(図4-4~6)の組み合わせで、6091A・6717Aはまず大安寺僧房用として製作・供給された後、左京五条五坊十三坪に供給されたものであることは別稿で明らかにした¹⁴⁾。このように大安寺と関係の深い軒瓦が多いことから蓋形隅木蓋瓦も大安寺井戸内の瓦葺建物で使用されたことも考えられる。

あるいは葛木寺・大安寺井戸内建物両所の瓦が混在して調査地で出土したものかも知れず、現時点ではいずれのものかは明らかにできないが、葛木寺・大安寺井戸の両遺跡とも蓋形隅木蓋瓦を用いた場所としては有力であると考えられる。

今後、調査地周辺で調査が進むに従って、蓋形隅木蓋瓦の使用場所だけでなく、上記した寺院の様相が解明されることを期待してひとまず小稿の筆を置きたい。

なお、独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部の千田剛造氏には隅木蓋瓦について、独立行政法人奈良文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部の花谷浩氏・西川雄大氏、奈良市埋蔵文化財調査センター官崎正裕氏・山前智敬氏には左京五条五坊十三坪の出土軒瓦について、助言・協力を頂いた。文末ではありますが、記して感謝致します。

註

- 1) 松浦五輪美・宮崎正裕「平城京左京五条五坊十三坪の調査 第274次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』 奈良市教育委員会1998
- 2) 小澤毅「第3章 遺構 3 瓦塙」「西大寺防災施設工事・発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所 1990 捱載の特殊埴口類
- 3) 藤垣哲也「古代の隅木蓋瓦」「藤澤一大先生古稀記念古文化論叢」古代を考える会、藤澤一大先生古稀記念論集刊行会 1983
- 4) 千田剛造「平城宮の隅木蓋瓦」「奈良国立文化財研究所年報1999-1」奈良国立文化財研究所 1999および千田剛造「薬師寺の隅木蓋瓦」「奈良国立文化財研究所年報2000-1」奈良国立文化財研究所 2000
- 5) 註1と同じ
- 6) 『大日本古文書』4-118~121p
- 7) 『大日本古文書』23-615~616p
- 8) 福山敏男「葛木寺と佐伯院(香積寺)」「奈良初寺院の研究」高桐書店 1948、および角田文衛「佐伯今毛人」吉川弘文館 1963 他に佐伯院・葛木寺の所在については、大井重二郎「平城京と条坊制度の研究」初音書房 1966では佐伯院を左京五条六坊五・六・十・十二・十三坪に、葛木寺を左京五条六坊四坪とする。小稿では福山・角田両氏の説に従った。
- 9) 「平安遺文」1-242~243p
- 10) 角田文衛「佐伯今毛人」吉川弘文館 1963
- 11) 註6と同じ
- 12) 2001年8月31日、奈良文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部にて、花谷浩氏・西川雄大氏・山前智敬氏に立ち会って頂き、和田庵寺Ⅶ型式(6702F)と実物照合を行い、同范であることを確認した。なお、和田庵寺・左京五条五坊十三坪川土6702Fはともに、瓦当面に木目痕が明確に確認できる段階のものである。
- 13) 図4の1~3は、胎土・焼成・色調が同じであり、同型式と思われる。2001年8月31日、奈良文

化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部にて、花谷清氏・西川雄大氏、山前智敬氏に立ち会って頂き、和田庵寺XXI型式と実物照合を行った。図4-1に関しては和田庵寺例に間弁の根元が向かって左に寄る個所が1箇所あり、1にもそのような個所があつたため、その部分で比較した。隣接する弁の子葉の形状も似ており、観賞する根柢は無かつた。図4-2に関しては、和田庵寺例とよく似た面違歯紋であったが、小片のため位置を特定できなかつた。図4-3に関しては、あまりにも小片のため比較できなかつた。以上図4-1に関しては異范とする根柢は無かつたものの、同范かどうかに関しては、さらなる良好資料を待つたほうが良いとおもわれる為、ここでは同范とは断定しない。

- 14) 原田憲二郎「記号「」が押捺された「大安寺式軒瓦」「瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—」1999

表4 参考文献

- 1 「平城宮発掘調査報告 XI」奈良国立文化財研究所 1981
- 2 「千田剛道「平城宮の隅木蓋瓦」」奈良国立文化財研究所年報1999- I」奈良国立文化財研究所 1999
- 3 「平城宮発掘調査報告 XIII」奈良国立文化財研究所 1991
- 4 「平城宮発掘調査報告 XIV」奈良国立文化財研究所 1993
- 5 「平城宮発掘調査報告 IV」奈良国立文化財研究所 1978
- 6 稲垣晋也「古代の隅木蓋瓦」「藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢」古代を考える会・藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会 1983
- 7 「崇徳寺南門付近の調査」「昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」奈良国立文化財研究所 1982
- 8 「崇徳寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所 1987
- 9 「天平の地宝」奈良国立博物館 1961
- 10 「興福寺食堂発掘調査報告」奈良国立文化財研究所 1959
- 11 「(1) 北西中房の調査」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(第1分冊) 平成9年度」奈良市教育委員会 1998
- 12 「西隆寺発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所 1993
- 13 「法隆寺の調査 4回廻廊地区」「昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」奈良国立文化財研究所 1981
- 14 「法隆寺境内の調査 1」「昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」奈良国立文化財研究所 1980
- 15 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I」奈良国立文化財研究所 1976
- 16 「川原寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所 1960
- 17 「かしばの文化財 9号寺庭寺の瓦」「香芝市二上山博物館 1999
- 18 「六波羅薬寺民俗資料緊急調査報告書(第2分冊)」「元興寺仏教民俗資料研究所 1971
- 19 「忍仁宮跡昭和53年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報1979」「京都府教育委員会 1979
- 20 「難波宮址の研究 研究予察報告第6」難波宮址顕彰会 大阪市立大学難波宮址研究会 1970
- 21 「但馬国分寺跡 I」「兵庫県城崎郡山高町教育委員会 1975
- 22 「飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告」「高山市教育委員会 1975
- 23 「板木県岩舟町豊岡遺跡発掘調査報告書」日本窯業史研究所 1976
- 24 「下野国分寺 XII」「栃木県文化振興事業団熙藏文化財センター 1997

奈良市埋蔵文化財調査センター紀要
2001

印刷 平成14年 3月 22日

発行 平成14年 3月 28日

発行 奈良市教育委員会

奈良市二条大路南1丁目1番1号

印刷 関西美術印刷株式会社

奈良市西木辻八軒町153-1